

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：38002

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K04115

研究課題名（和文）ミュージアム・史跡観光を用いた多文化円卓対話の東アジアにおける効果研究

研究課題名（英文）A Study on the Effects of Multicultural Roundtable Dialogue on Museums and Historical sites in East Asia

研究代表者

渋谷 百代（SHIBUYA, Momoyo）

沖縄大学・人文学部・教授

研究者番号：20451734

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東アジアの文脈で異なる世界観を持つ人々が対話を通じ他者の視点に触れながらどのように自己認識や相手に対する理解を再構築させていくか、直接異文化対話の効果を検証することを課題とした。データは、日本と東アジア各国の学生が戦争ミュージアムの鑑賞経験を共有する対話や参加者の個別インタビューから得た。しかし直接異文化対話の効果検証に十分とは言えず、今後も収集を続けることが必要だ。ただ限定的ながら、戦争ミュージアムを話題とした異文化対話の場において集合的記憶や世界観の再構築を迫るような衝突や変化等は見られず、東アジア地域のデジタル世代がこれまでとは異なる関係を築く可能性を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が収集したデータからは、学術的意義のある知見にはつながらなかったが、他方、個々人の中に形成された集団記憶とそれに基づく歴史や他集団に関わる認識、さらにそこから形成される現在の国際関係認識を組み込んだ異文化対話分析の過程暫定モデルを提示できたこと、また東アジアの若者の現在地を示唆できたことは意義があったと考えられる。若年層の希薄な国民的記憶、それを対話で対立的に「語らない」ことの先に、地域としての集合的記憶が形成されていくのか、誰の記憶がその中心に置かれるのか、対話なき並存へと向かうのか等、デジタル世代の東アジア地域コミュニケーションの新たな研究課題につながった。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine the effects of direct cross-cultural dialogue, i.e. how people with different worldviews can reconstruct their self-perceptions and understanding of the other through dialogue and exposure to the perspectives of the other in an East Asian context. Data were obtained from dialogues and individual interviews in which students from East Asian countries shared their experiences of viewing war museums. However, it was not sufficient to verify the effectiveness of cross-cultural dialogue, and further collection is needed in the future. What has been found so far is that no conflicts or changes were leading to the reconstruction of collective memories or worldviews in cross-cultural dialogues on the topic of war museums and that a different relationship can be built for the digital generation in the East Asian region.

研究分野：国際社会学

キーワード：異文化対話 日本 東アジア ミュージアム

1. 研究開始当初の背景

東アジアの悪化した関係の中で、歴史認識をめぐる問題の解決に向けた動きとして、近年、共同歴史教科書を作るなどの試みも見られたが、対話のシナジーが得られるような成果はまだなく、互いの国に良くない印象を持つ人の割合は高い状態が続いた。そのような隣国関係は、当事国だけでなく地域全体のリスクにもなり得るため、その場しのぎではない改善が求められる。

コンフリクト・マネジメント研究では、特に長期的に続く関係の場合、対話による協調的な解決を模索することが重要とされている。しかし、異なる社会的文化的背景を持つ人々は、共通の知識や世界観を持ち合わせていないため、そもそも対話自体を成立させることは難しい。それに加えて自分の持つ世界観と合わない新しい知識・情報は取り込みにくく、逆に世界観を強化・固定化するような知識・情報を選んで取り込んでいくのが人間の性質だ。新しい情報を取り込めたとしても、一旦形成された態度を変化させることはほとんどない。異文化対立の際のメディア消費に関する調査では、強い信念があればあるほど、たとえ対立相手についての情報が増えて理解が進んだとしても、自分の態度を変化させるより、むしろ強硬な態度に転じることがあり、相手との対話があっても同様であることを示唆している (Shibuya 2014 など)。

他方、史跡訪問などを通じて新しい知識 (現地側の見方) を学ぶ姿が観光客には見られる。あまり事前の知識が豊富ではなく明確な態度も形成していない場面では「現実」「実物」のパワーを持ったメッセージは浸透すると考えられる。東アジア地域の関係改善を模索する中で、具体的にどのような知識を共有できるのか、どのように対話が個々人の世界観に変更をもたらすのか、を解明することの意義は小さくない。

2. 研究の目的

本研究は、東アジアの文脈で、異なる認識を持つ人々が対話を通じ他者の視点に触れながらどのように自身の持つ認識を再構築させていくか、その再構築プロセスを明らかにし、効果的な対話によるコンフリクト・マネジメントを検討するための知見を得ることを目的とした。そのために、まず(1)東アジア (台湾、中国、韓国) でそれぞれ認識される歴史的事実とそれによって構築された世界がどのようなものであり、個々人がどのようにそれを把握するのか、そしてそれを踏まえて(2)相手に向き合った時にどのように自らが持つ認識を変化させて (または、変化させずに) 対話を成立させるか、を検証する。

3. 研究の方法

上記の検証を行うため、「円卓シネマ」(伊藤・山本 2011) のアプローチを調査に援用する。円卓シネマは、異なる文化を背景にした人々が、映画という共通のコンテンツを媒介に、その理解の仕方の相違を対話で互いに認識するという異文化の学びの場である。この研究では、映画に代わり、国家の歴史認識がより色濃く反映するミュージアムや史跡観光をメディアとして利用する。

ミュージアム観光はエンターテインメントでありながら教育効果を持つエンターテインメント・エデュケーション (EE) と捉えることができ、幅広い人々を対象に学校教育以外で教育の機会を提供している。ただし今回の調査対象地は、いずれも日本の統治・占領を一定期間経験した地域であるという共通点がある一方、それぞれ日本統治・占領前後の経験が異なり、現在の国のあり方も異なるため、日本の統治・占領に関する歴史認識も特有のものを持っており、国別に調査を行うこととした。

具体的には、日本ともう1国の大学生を参加者として当該両国の戦争ミュージアムを訪れ、そこで語られる異なる歴史認識をどのように受け止めるか、円卓対話がどのように展開するのか、円卓対話により視点がどのように変化するか、対話相手や一般的な異文化コミュニケーションに対する態度がどのように変化するか、を焦点にしてデータを収集分析し、多文化円卓対話の効果を解明しようと計画した。特に「および」については、対話の前提状態を(1)自国で触れる知識だけを持つ状態(2)他者の持つ知識・認識を共有した状態(3)自身の知識・認識を他者と共有した状態、に分け、各状況でどう対話が展開し、参加者の認識にどんな変化が起こるのか、について注目し分析の枠組みとした。

しかし、実際にデータを収集する段階で COVID-19 の感染拡大があり、日本を含め各国で渡航や行動が制限されたため、当初想定していた研究計画は見直しせざるを得なくなった。ミュージアムも閉鎖され、グループで訪問することも困難になったためバーチャル展示の個別閲覧に切り替えた。また、直接対面で対話をするということが研究の重要な要素だったものの、状況を鑑み、オンラインでの対話に変更した。オンライン対話は、空間を共

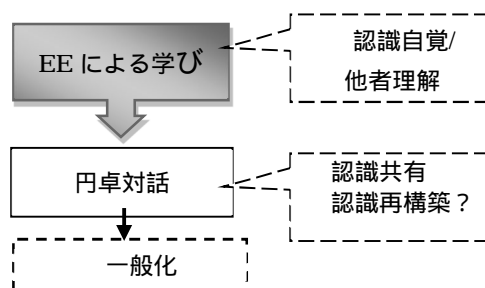


図1 調査の計画

有する直接対話には交換する情報量という点でかなわないが、少なくとも双方向コミュニケーションであり、かつ文脈によらない言語化が求められる点で代替案たりうると判断した。

4. 研究成果

(1) ミュージアムコンテンツを題材とした異文化対話過程の枠組み

本研究では、(異文化集団間の)接触仮説や文化触変、態度変容といった既存の概念・理論を整理し、集団関係の背後にある国際関係、歴史・文化等を踏まえたものとして分析するための枠組みを検討した。見直しは今後も必要ではありながら、文化触変過程のモデル図(平野 2000)を参考にしながら、個々人の中に形成された集団記憶とそれに基づく歴史や他集団に関わる認識、さらにそこから形成される現在の国際関係認識を組み込んだ異文化対話分析のための過程暫定モデルを描いた(図2)。その後、ミュージアムコンテンツが扱う集合的記憶についても、異文化対話コミュニティに参加する各アクターが図2の過程を実践し貢献する関係性について概念図を示した(図3)。

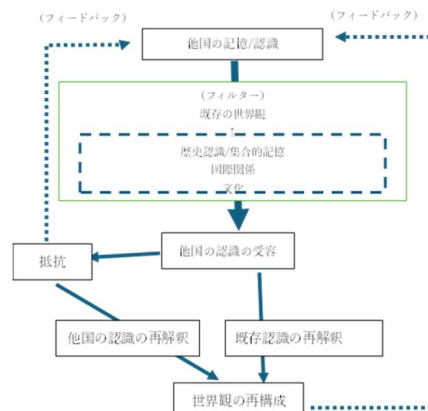


図2 異文化対話の過程(暫定モデル)

(2) 東アジアの歴史認識とミュージアム

各国ミュージアムの展示内容から、各国の歴史観やそれを伝えようとする姿勢に違いがあることが示された。各国は自らの戦争体験を語る上で、独自の加害者/被害者ストーリーを構築し、それを国内向けの教育やミュージアム展示で展開している。この点は、既存の知見を確認することになった。

また、図3で示したような、ミュージアムを取り込んだ異文化対話コミュニティによるインクルーシブな集合的記憶は、まだ十分に成立しているとは言い難い。SNS等での人々のフィードバックが包括される集合的記憶の再構築に関しては、さらなる研究が求められる。

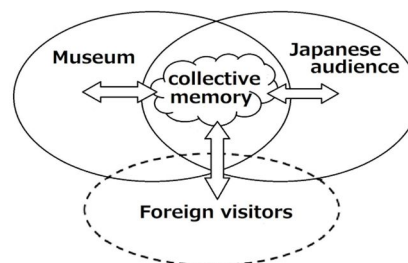


図3 ミュージアムのインクルーシブな集合的記憶形成イメージ

(3) 調査参加者の歴史認識と対話の効果

本研究の核心的な問いである直接対話の効果については、議論に十分な分析結果を得ることはできなかった。理由としてまず、参加者の歴史に関する知識があまり多いとは言えなかった、あるいは、できれば避けたい話題であるという認識が強く働いた、ということから対話の内容が表面的な内容に終始してしまったことが挙げられる。こうした傾向は日本の参加者に顕著だった(「あまりよく知らないので話せない」「(相手の国に日本の戦時行為について)言われれば、あーそうか、としか...」「わざわざ話して微妙な空気にしたくない」。他方、他国の参加者はそれなりに歴史を学んだことや日本で語られる歴史とは異なることへの指摘は円卓会議前後のインタビューの中で言及しているものの、会議の中で自らの歴史認識について明確に語ることは避けている。

また、会議で使用する言語について、当初はどの参加者にとっても母語ではない中立言語での対話を計画したが、本研究期間中にそれを実現できる状況を作ることができなかったことも問題だった。日本人調査参加者の英語力が十分でなく、日本語を対話言語として使用することになってしまい、相手国の学生にも日本語での対話に対応してもらおう、または通訳を介した対話を行う、という事態になり、対等でフラットな直接コミュニケーションの場にはならず、日本語によるコミュニケーションの影響を強く受ける形となってしまった。

これらの理由から、本研究が収集したデータからは、意義のある知見を提示できるだけの分析にはつながらなかった。しかし一方で、そのこと自体が東アジアの若者の現在地を示唆することも言える。希薄な国家内集合的記憶や、面と向かって「語られない」フィードバックの先に、東アジア地域内の新たな集合的記憶が形成されていくのか、誰の記憶がその中心に置かれていくのか、あるいは、対話なき並存へと向かうのか。東アジア地域のコミュニケーションのあり方について、本研究期間終了後も引き続き課題として研究していく。

参考文献

- Shibuya, M. *International Communication and Information: The impact of the cognitive gap on whaling issue between Japan and Australia*. paper presented at PACA Biennial Convention, 2014.
- 伊藤哲司・山本登志哉. 日韓傷ついた関係の修復: 円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界2. 北大路書房, 2011.
- 平野健一郎. 国際文化論. 東京大学出版会, 2000.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Shibuya, M.K.	4. 巻 11(特集3)
2. 論文標題 The Structure of Personal Networks in Asian Megacities: Urbanisation revisited	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 21世紀東アジア社会学	6. 最初と最後の頁 71-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shibuya, M.K.	4. 巻 15
2. 論文標題 Imagined Empire Building through Tourism: How the Japanese Travelled in Their Colonies	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 埼玉大学経済学部ワーキングペーパー	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shibuya, M.K.	4. 巻 15
2. 論文標題 Imagined Empire Building through Tourism: How the Japanese Travelled in Their Colonies	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 埼玉大学経済学部ワーキングペーパーシリーズ	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 渋谷百代
2. 発表標題 ミュージアムとソフトパワー：日本の戦争資料キュレーションに見る東アジアとの関係
3. 学会等名 国際行動学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Momoyo Shibuya
2. 発表標題 Communication with Museum Experience
3. 学会等名 28th IAICS International Conference 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shibuya, M.K.
2. 発表標題 Ethnic Media Revisited: Community in Transnationality and Transreality
3. 学会等名 the Second Congress of East Asian Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shibuya, M.K.
2. 発表標題 Communication and Peace in Asia
3. 学会等名 EWC/EWCA 2018 International Conference, Seoul (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shibuya, M.K.
2. 発表標題 Communication and Peace in Asia: with a focus n Japan-Korea Relationship
3. 学会等名 EWCA Tokyo Mini-Conference
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shibuya, M.K.
2. 発表標題 'Us' and 'them' in Stories of Local Protest : A comparative Analysis of Newspaper Editorial Discourses
3. 学会等名 International Symposium of Business and Social Science (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shibuya, M.K.
2. 発表標題 Borders and Identity: Okinawa in Discourse
3. 学会等名 Inaugural Congress of East Asian Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Chitty, N., Ji, L. & Rawnsley, G.D. (eds.)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 448
3. 書名 The Routledge Handbook of Soft Power. 2nd ed.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

韓国	東国大学校			
その他の国・地域（台湾）	東呉大學			